地域の情報をお届け!

呉トピックス

大きなトウモロコシを収穫

7月中旬、JAひろしま広北学童農園で呉市立三坂地小学校3年生52人と善通寺学園善通寺幼稚園年長の園児82人がトウモロコシを収穫しました。

例年、総合的な学習の時間を利用し農業体験を取り入れ、農園の種まきと収穫の農作業をJA職員と協力して行ないます。今年度は畝間を広くして、児童や園児が安全に体験できるよう工夫しました。

JAの呉アグリセンター職員にもぎ取り方を教えてもらいながら、一生懸命に収穫していた花中蒼空さん（8）は「大きく育ったトウモロコシに驚いた。家族で食べるのが楽しみ」と満足そうに話しました。

▲トウモロコシを力いっぱいもぎ取る児童、園児ら

施肥防除指導へつなげる 水稲圃場定点調査

呉地域本部の営農経済部営農販売課は7月初旬、JA全農ひろしまと共同で管内の水稲産地である呉市郷原、苗代、栃原地区の展示圃場10カ所で2023年度産水稲の定点調査を行ないました。

この調査は決まった圃場で水稲の草丈や茎数、葉色などの生育状況や病害虫と雑草の発生状況を調べ、また、新たな肥料や農薬などを試験的に使用し効力の確認も行ないます。

調査では、除草剤を散布した圃場に50㎝四方の枠で囲った除草剤を使わない箇所と使った箇所を設置し、雑草の本数や種類を記録。生産者が立ち会い薬剤の効力を確認しました。

結果は毎年積み上げ、栽培ごよみの作成や生産者への施肥防除指導に繋げます。

▲生産者と雑草の数を見て薬剤使用の効力を確認（呉市郷原町）

倉橋産 夏キュウリ出荷最盛

7月下旬、呉地域本部管内の呉市倉橋町で夏キュウリの出荷が最盛期を迎え、早朝から収穫に追われます。生産するのは株式会社菜ずき人。多い日には1日約400kgを出荷します。

同法人は2021年からキュウリの周年栽培に取り組み、延べ44aのビニールハウスで春、夏、秋と隙間なく出荷。7月と10月は収穫期が重なります。

今年の春作から「更新つる下ろし」に仕立て方法を変え、夏作、秋作と試しながら秀品率と作業効率の向上を見込みます。また、2021年2月には春作用ハウスに統合環境制御機器を導入。収量の安定化と品質の良いキュウリの生産へ温度や水、肥料など徹底して管理します。

▲大きさを確認しながら収穫する作業員ら

後継者候補や兼業農家に向けて かんきつ公開講座開催 蒲刈アグリセンター

蒲刈アグリセンターは呉市蒲刈町の「恵みの丘蒲刈」で7月下旬、公開講座を開き蒲刈地区の柑橘生産農家17人が参加しました。JA広島果実連の協力で初めて取り組みます。

親の手伝いや兼業農家で平日の講習会に参加できない、ベテランの中だと恥ずかしくて質問できないなどの要望に応え、地域の後継者候補や農家を対象に産地の維持向上と生産者の技術向上を目指し、柑橘栽培の基本的な技術講習を行ないます。

初回講座は、JA広島果実連広島県果樹農業振興対策センターの栗木富生農園長が講師となり、中晩柑類の摘果や病害虫の防除について学び、園地で不知火（しらぬひ）の摘果作業を行ないました。

8月は温州ミカンの摘果を行ない、不知火は収穫まで引き続き管理する予定。講座は毎月1回、土曜または日曜日の午前中に開催する計画です。

▲栗木農園長の説明に聞き入る参加者

なるほど〜のう！営農情報

落葉果樹

イチジク

▽礼肥の施用

樹勢の回復と貯蔵養分を蓄積させる目的に施用します。

施用するタイミングは収穫が7～8割終了した時点となります。

ただし、樹勢の強い若木などは控えめに施用しましょう。

▽病害虫防除

園内に腐敗した果実を放置していると、それが病害虫の感染源となります。可能な限り腐敗果などは園外に持ち出して処分することを心がけましょう。

▽台風対策

葉の大きいイチジクは他の果樹に比べ台風被害を受けやすく、強風により倒木や枝折れ、そして果実は風スレなどによる傷果ができやすくなります。

対策としては、支柱などで樹を固定し補強することです。

日頃から風の当たりやすい園地で栽培している場合は、防風網を設置するなどの対策も必要です。

カキ

▽汚染果対策

果実が成熟するに従い、皮の一部が黒変するものを「汚染果」といいます。

特に西条柿や太秋で多く発生します。

主な原因は、園内の通気性や日焼け、風スレ、秋の多雨などです。

日頃から園内の除草を徹底し湿度を下げたり、枝が過繁茂とならないよう通気性を良くし、果実が乾きやすい環境を作りましょう。

モモ

▽礼肥と土壌改良

8月下旬から9月中旬に肥料を施用しましょう。

また、秋根が発生する前の9月から10月にスコップなどで断根し、完熟たい肥や土壌改良剤の施用を行ないましょう。

▽秋季せん定

この時期のせん定の目的は、①樹勢を落ち着かせる②骨格の形成③葉芽や枝の充実となります。

樹冠内部から徒長している枝やかぶさり枝、勢いの強い枝などをせん除します。

せん除の程度は、冬のせん定量の約2割程度までにとどめます。

枝の伸長の心配がなくなる9月から実施しましょう。

キウイフルーツ

▽棚面管理

棚面が暗くなると糖度が低くなり、貯蔵性も低下するため、明るさを保つように心掛けましょう。

明るさは、棚下へ木漏れ日がさす程度です。

▽かん水

乾燥が続く場合は、葉が傷み落葉することがあります。

引き続き、適度な土壌水分を保ちましょう。

ブドウ

▽枝管理

収穫後、果実がなくなり、枝が再発生しやすくなります。貯蔵養分の浪費を防ぎ、結果母枝の充実をはかるために副梢（春に発生した枝の先端や脇から発生した枝）の摘芯やかぎ取りを行ない、枝の伸長を抑制しましょう。

また、縮伐予定の樹は、貯蔵養分を溜めこむ前に切り縮めましょう。

MEMO

落葉果樹は秋になると、葉で作った養分を枝や根に貯蔵し、冬支度の準備に入り始めます。

効率よく貯蔵を促すためにも、適度な葉数の調整や肥料の施用、かん水などが重要となります。

作業が遅れないように気を付けましょう。

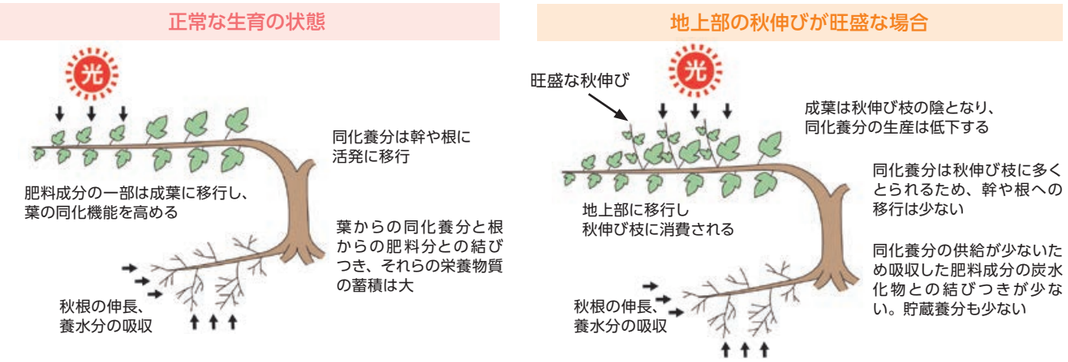


図　果樹における秋根の働きと貯蔵養分蓄積との関係（模式図、岡本）―「農業技術体系」より―

家庭菜園

菜園では葉菜・根菜類のタネまき、育苗・植え付け、間引き、追肥・土寄せ等の作業が並行的に行なわれ、繁忙期を迎えます。

野菜も夏野菜から秋冬野菜へ移行していくため、次の点に気を付けて管理を行なっていきましょう。

①種まき、植え付け適期を逃さない

9月に植える野菜の多くは、秋の涼しい時期に成長し、寒くなるにつれて徐々に成長スピードが落ちてしまいます。植え付けの適期を逃すと十分に成長せずに冬を迎えてしまうため、生育適温を確認して適期を逃さないようにしましょう。

②害虫対策をする

9月は害虫がまだまだ活動する時期です。特にハクサイ、キャベツ、ブロッコリー、カリフラワーといったアブラナ科の葉菜類は、アオムシやハスモンヨトウなどチョウ目害虫の被害を受けやすいため、防虫ネットをトンネル状にかけるなど対策をしましょう。また、植え付け時に農薬を使用し、若齢で害虫を駆除するなど早めの防除を心がけましょう。

③台風対策をする

長雨が続くと、土中が常に湿って病気の発生や、害虫被害も多くなります。また、暴風被害によって茎が折れてしまったり、飛ばされてしまう事もありますので天気予報をチェックして、台風が接近しそうになったら事前に強風と大雨の対策を立て、予防しましょう。

○溝切り

大雨が予想される場合は、排水溝を整備して通路の端を溝切りして排水を心掛けましょう。また、大雨が降った後は傷んだ傷口から病気にかかりやすいので殺菌剤の散布をおすすめします。

○べたかけ・ビニルキャップ・土寄せ

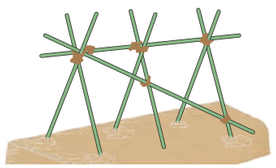
台風が多くなる晩夏や初秋は、秋冬野菜の種まきや植え付け時期にあたり影響を受けやすくなります。寒冷紗等でべた掛けをしたり、苗にビニルキャップをかぶせて固定して幼苗が風で倒れたり、吹き飛ばされないように管理をしましょう。また、ネギ類など草姿の細い野菜は土寄せをして揺れを減らしましょう。

○果菜類の支柱の補強

支柱は強風にあおられても倒れない太さのものを選び、行燈式ではなく合掌式にして立てると強度が増します。また単独で支柱を立てるのではなく、隣の株の支柱と横向きにして支柱どうしをつなげると更に強度が増して倒れにくくなります。

また、数株まとめて寒冷紗で覆い上からヒモでしばり、台風が通過したら風で倒れて自力で立ち上がれない株は支柱に誘引し直しましょう。

■合掌式支柱



プチ情報

【葉菜類の「直まき」と「移植」栽培の特徴】

葉菜類の栽培方法には、主に畑に直接タネをまいて育てる「直（じか）まき」と育苗床やポットで育てた苗を植付ける「移植」の方法があります。

●直まきの特徴

①育苗や植え付け作業がなく、省力になる。
②発芽から幼苗期に病害虫や乾燥、風水害の気象災害を受けるリスクが高い。
③多くの種子を密にまき、播種から収穫までの生育期間の短いものが多い。

●移植の特徴

①育苗資材や場所の確保や育苗時のかん水、植え付けなどの作業が必要。
②育苗により、大切な幼苗期を病害虫や気象災害から守ることができる。
③幼苗期を苗床で経過することによって、本畑で栽培する期間を短縮できるので、本畑の利用（回転）率を高めることができる。
④果菜類は移植が一般的。葉物でも播種から収穫までの期間が長く、疎植のものは、移植栽培が多い。

9月に植えるおすすめ野菜

根菜類	葉菜類	
・ダイコン	・葉ネギ	・ニンニク
・ジャガイモ	・コマツナ	・ミズナ
・カブ	・レタス	・ワケギ
・ラディッシュ	・キャベツ	・ハクサイ
・ゴボウ	・タアサイ	・ラッキョウ
など	・カラシナ	・チンゲンサイ
	・ホウレンソウ	・シュンギク
	・ベビーリーフ	など

支店間で知識共有　ＪＡ共済事務リーダー会議

６月22日、呉地域本部は新たに共済事務リーダーを対象とした会議を始めました。参加する事務リーダーは各支店１名ずつの14人。担当者や支店間のつながりの強化、地域本部内での情報共有と対応力などの向上が目的で初の取り組みです。

14支店41人のスマイルサポーター（スマサポ）が、組合員・利用者の窓口を担当しています。2023年４月の合併後、スマサポ同士や本支店間の連携、交流が希薄になり、情報共有や知識向上も困難になるといった課題を心配した同地域本部共済課が本店共済管理課と相談して取り組み、今後も定期的に開催する予定です。

▲共済事務リーダーが集まって情報共有などを行ないました

ときめき女性部通信

『家の光』で夏帽子づくり

ＪＡひろしま女性部呉地区本部下島支部と大古支部は、７月から『家の光』５月号を参考に「エコアンダリアで編む夏帽子」を作りました。

レーヨンでできたテープ状のエコアンダリアをかぎ針で帽子型のネットに編みつけて作ります。少し難易度の高い手芸に苦戦しましたが、部員同士助け合いながら作り上げました。苦労した分、完成した帽子に喜びはひとしおです。

▲帽子作りに没頭する部員

▲作り上げた夏帽子に笑顔の皆さん

技術向上へ　柑橘摘果講習会　女性部下島支部

▲小川技師に摘果方法を教わる部員ら

ＪＡひろしま女性部呉地区本部下島支部は７月初旬、同ＪＡ蒲刈アグリセンターと協力し呉市下蒲刈町にある柑橘園地で摘果講習会を開き、部員４人が参加しました。

ＪＡでは地区ごとに講習会を開催するほか、女性の参加しやすさと質問しやすい講習会、適期作業の徹底と栽培技術の向上を目的にせん定と摘果の講習会を行なっています。

講習会はＪＡ広島果実連の小川哲也技師を講師に、部員の管理する温州ミカンと不知火（しらぬひ）等の園地で、部員らが樹の内側や日陰に着いた果実や基準より小さな果実を摘果し、果実が密集しないように気をつけて作業しました。